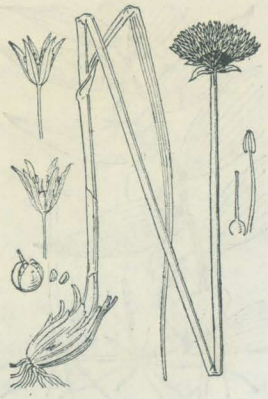
第3707図

ゆり科



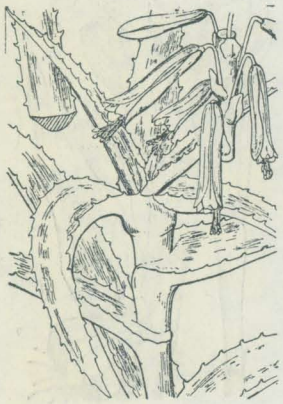
えぞねぎ

Allium Schoenoprasum *L.*
var. foliosum *Regel*

北地の海岸近くに自生する多年生草本。鱗茎は長卵形で薄い鱗片葉に包まれ、アサツキと同様である。葉は円柱形中空で径5mm内外。6月、高さ20–40cm円柱形の花茎を出し、下部には1–2の葉があり、頂につく花序は初め膜質の苞につつまれるが、後開いてほぼ半球形となる。花梗は長さ約1cm、花は淡紅紫色でやや鐘状に半開する。花被片は6、卵状披針形で先端は長く尖り、中脈は色が濃く、長さ1cm許。雄芯は6本、花被片よりはるかに短く、花糸はほぼ針形で長さ約5mm、葯は初め淡紫色。中央に1雌芯がある。全体ネギに似た臭があり、鱗茎と葉を食用にする。和名は蝦夷（北海道）に産するネギという意味。

第3708図

ゆり科



きだちろかい

Aloe arborescens *Mill.*
var. natalensis *Berger*

南アフリカ原産の多肉灌木状の草本で、我国では観賞用に温室で培養し、又暖地では屋外に栽植する。全体蒼白緑色で、茎は円く径2.5cm許、葉は互生し、半円柱状で、背面は円く上面は稍凹面をなし、線状披針形で先端は漸次細って尖り、葉縁に鋭刺あり、刺は多少前方に鈎曲し、葉基は拡って茎を半ば以上抱き葉縁は茎上に流下し、茎の表面は白緑色で、葉から流下する緑脈がある。夏に長柄の総状花序を腋から直立して生じ、その端に稍〻密に橙黄色、筒状長さ2cm許の花を垂下して開く。花筒は先端6裂して小裂片となり、赤黄に緑色の彩があり、6雄芯1雌芯を具える。和名キダチロカイは木立蘆會で徳川時代にこの植物の属名 Aloe を蘆會に当てロエと読んだのに始まる。

第3709図

ゆり科

ながばみずぎぼうし

一名みずぎぼうし

Hosta longissima *Honda*

東海以西の暖地の水沢地に生ずる多年生草本。高さ30–50cm。典型的のものは本図より葉数少なく、花も甚だ細い棍棒状に近い漏斗形で、花蓋片は殆んど直立状態を呈するが、広義のコバギボウシ（本版にいうミズギボウシ）の水生品との間に移行がある。葉は広線形、長さ10–30cm、径1cm内外、多くは立つ。軟質で多少質厚く、表面灰緑色、しかも強い光沢がある。盛夏に茎を立てて疎な稍々扁側生の総状花序をつける。苞は舟形で緑色、花は白に近い淡紫色。長さ25mm内外、往々短かい匍枝を出すことあり。

とくだま

Hosta Siebo'diana *Engl.*
var. glauca *Makino*

観賞用に栽培している多年生草本で高さ30cm内外、オオバギボウシに移行するので区別し難いものもあるが、典型的のものは、葉身円形水平に位置し、強剛質、はじめ白霜を帯び暗蒼緑色で、径12cm内外、表面は第2次脈の間が種々にへこむため、不規則な凹凸となり、縁は多少盛上がって内側に凹む。花序は6月頃出るが多くは葉より丈低く、淡い桃色乃至白色花が頂上に少数集って咲く。花蓋は正開せず、倒卵状のつぼみが僅かにほころびた程度で終る。本図は丁度中間的の株である。和名の語源不明だが、玉は正開しない白い花をたとえたものであろう。

第3710図

ゆり科

なんかいぎぼうし

Hosta tardiva *Nakai*

関西以西の低山中の稍々湿った地に自生する多年生草本で株立となり、葉群の高さ30cm内外、関西地方には屢々園養する。葉は卵形又は卵状楕円形で、長さ13cm内外、稍々平坦に開き暗黄緑色、光沢多少あり、側脈各側5–6、葉身と不連続に傾いて直線的な長柄があり、葉身よりも長く、汚緑色に暗紫点を打つ。9月頃に花茎が斜めに伸び、その長さ50cm内外、花は暗灰紫色で、総状花序となり、花下の苞は多少膜質で淡紫を帯びる。花冠は漏斗形で、広筒部は細筒部から急に開く。和名は南海道に産する意。土佐では多く懸崖に生じ山菜とするのでタキナという。

第3711図

ゆり科

たまのかんざし（玉簪花）

Hosta plantaginea *Aschers.*

支那原産の培養する多年生草本。葉群の高さ30–50cm、花茎は1mに達する。多肉強剛の塊茎あり、葉は長柄のある長卵状楕円形で15cm内外、明るい黄緑色、光沢に富み、縁は軽く波打つ。裏も同一色、夏から秋にかかる頃に花序を高く抽いて純白花をつける。苞は緑色肉質、開出し宿存性、花はユリとも思われる大輪で長さ10cm内外、夕方開き朝閉じ、芳香あり、ギボウシの類であるが雄芯が先端屈起すること軽微、また花蓋の細筒内基部に癒合している特性がある。和名は漢名からきたもの、長大なつぼみを玉（ぎょく）で作ったかんざしにたとえたもの。

第3712図

ゆり科